

## 第二回東京ポエトリーフエスティバル と第六回世界俳句協会大会二〇一一

Ichitarô YAMAMOTO  
山本一太郎

夏の日差しが続く九月の週末、お茶の水の明治大学リパティホールで第二回東京ポエトリーフエスティバルが始まった。今回は第六回世界俳句協会大会との同時開催。テーマは「神話へ、その彼方へ」。青いポスターは清水国治のイラストが印象的。円状に連なる人や木々や動物の姿に、混沌とした神話世界を感じる。



日本を含む十四国から約六十人の俳人、詩人、歌人が集まる。九日（金）の前夜祭では多くの参加者が顔を合わせ、にぎやかな集まりとなった。東日本大震災からまだ半年。地震や放射能をおそれて二の足を踏む人がいるかもしれないと思ったが、出席者の半数を超える海外の人たちもリラックスした表情を見せている。各国の人々が集う中、世界俳句協会会員の丹下尤子や詩人の新井高子は伝統的

な着物姿。台湾の呉昭新の親戚であるジュディ・オングはあでやかなチャイナドレス姿で出席。

淑徳大学教授松岡秀明による英語と日本語の司会で、立食パーティーは始まる。ディレクター夏石番矢の挨拶に続き、来賓の駐日スロヴェニア大使ヘレナ・ダルノーシエク・ゾルコや世界俳句フエスティバル・ペーチ二〇一〇をハンガリーで主催したユディット・ヴィハールなどの挨拶が快活になされ、日本で他に類のない国際詩祭がスタートした。アットホームな雰囲気の中で談笑する人たちの間に、自作詩を朗読する各国の詩人たちの言葉と、ウクレレ、中国琴、馬頭琴の楽器演奏が響く。

十日（土）の午前は世界俳句協会大会。協会の会員ではないがこの機会にぜひ見ておきたいという各国の詩人も出席している。まず代表の夏石番矢が世界の俳句の情勢について説明。次回第七回の世界俳句協会大会が、二〇一三年九月に南米コロンビアのメデジン市で開催されることも発表。鎌倉佐弓からは会計報告。その後、世界俳句協会の会員が『世界俳句協会アンソロジー二〇一一』から一句ずつを朗読。

じゃが薯の花に少年がいる僕でした  
ムクドリの子の歌／終止符を打つ／不眠のテキスト  
田中 陽

大寒や前立腺に虎眠る  
コルネリウス・プラテリス（リトアニア）  
八木 忠栄  
天国の扉の鍵は今地下金庫  
丹下 尤子

午後は「詩と神話―神話へ、その彼方へ」というテーマに沿った、出演詩人五人によるショートスピーチが始まった。司会は大阪府立大学教授でもある詩人の細見和之。詩人の八木忠栄の娘である八木純子はメモもとらず巧みに通訳をこなす。イスラエルのモルデカイ・ゲルドマン、歌人の三枝浩樹、同じく歌人の阿木津英の後に、リトアニアのコルネリウス・プラテリ



朗読する夏石番矢

ウス、台湾の呉昭新がスピーチ。ゲルドマンはイスラエルのテルアビブに育ったことから、台湾の呉は小学校で日本語を覚えたことから語り始めた。

休憩をはさみ、いよいよ東京ポエトリーフェスティバルの朗読がスタート。トップバッターはギターの弾き語りで友部正人。シンガーとして知られている彼は、日本語と英語で歌詞を朗読したあと、ギターひとつで歌う。心に語りかけるメロディーに各国の詩人も大の短詩には、俳句的切れがある。

韓国の女性詩人イ・ジンミョンの朗読の後、夏石番矢の登場。民族衣装姿のウルグンが馬頭琴を演奏する。近刊俳句選集『ターコイズ・ミルク』（レットムーン・プレス、米国）収録の『真空律』と『神々のフーガ』から朗読。時には漂い広がり、時には走り舞うような馬頭琴の音色が、夏石の声と追いかけあう。

火ノ洗礼ヲ受ケテハ小人飛ビ翔チヌ  
海底の泉のむかしむかしかな

休憩をはさみ、午後四時から第二部。谷川俊太郎、リトアニアのコレネリユス・プラテリス、歌人の阿木津英、俳人の今井聖、呉昭新、アメリカの元気な女性詩人ジョイエル・ミックス、ウイニー・自由律俳人の中塚唯人の、

宇宙戦艦ヤマトは帰ってくるとさくら散った

などの朗読、さらにモンゴルのTs・ツオルモンの朗読。彼の民族衣装をまとった姿は、プロレスラー武藤敬司のように勇ましい。この頃から聴衆がどんどん増えてくる。

質疑応答コーナーでは活発な議論も生じた。俳句とは何かという問いにはいつも多様な意見が噴出する。海外の人は禪やサトリに関係があると言うが、夏石は「アニミズムに関係がある」と発言。

一連のセッション終了後、会場から歩いて数分のバー、御茶の水スカボスで世界俳句協会パーティー。ここでもバイオリン奏者に合わせて詩や俳句を朗読。モンゴル人詩人の声量はすごい。

荒野を飛ぶ鶴を眺める者なし

J・ヘシグト（内モンゴル）

芭蕉と俳句は俺があこがれる沈まぬ太陽

ハダー・センドー（モンゴル）

この大会二日目のスムーズな進行ぶりに、運営事務局長の石倉秀樹をはじめ、各実行委員やスタッフがしっかりとイベントを支えているのがよく伝わってくる。なかでも今年「吟遊俳句賞二〇一」を受賞した長嶺千晶や会場にもなった明治大学の学生四人が、献身的に受付をこなしていたのが印象に残った。ビデオ撮影の渡辺望、カメラの池田匠にも感謝。

連日飲み過ぎのきらいはあるが、十一日（日）もスタート。

最初の朗読は短歌の大御所、岡井隆。安定感のある堂々とした朗読。新井高子の詩の朗読はリズムカル。本人が朗読している映像を流しながら、そこに自分の言葉を合わせる。リアルな言葉が余韻に聞こえたり、言葉が音のように聞こえたり、興味深

い取り組みである。ハンガリーのバコシユ・フェレンツの俳句の日本語訳は詩人の田村雅之が朗読。バコシユの、

スーディスト・ビーチ／アダムとイブが／メアドの交換

に、客席から楽しい笑い声上がる。続いて田村雅之が自作詩を朗読した後、司会としても活躍する堀田季何が三つの災害（原爆 9・11、3・11）と自分との関わりを語り、英語と俳句を朗読。最後の一句、

俳句を朗読し／喉が渇く／「今日」9・11

に客席から拍手。続いてニュージージーランドのドック・ドラムヘラーが自らウクレレ片手に詩を朗読したあと、俳人岩淵喜代子、そして歌人内藤明の次の作品の朗読へと続いた。

いく千の鯨が浜に打ち寄する夜やもしれぬ子の髪あらふ

午後は「神話としての俳句」というテーマで、五人の詩人によるショートスピーチ。細見和之、ハンガリーのユディット・ヴィハール、堀田季何、スロヴェニアのイストック・オイソニック、夏石番矢が順番にスピーチ。夏石は最後に、「世界的に見れば、俳句は575という形式以外に多数ある。575は少数派。日本はそれをまだ理解せず、大きく遅れている」と。

朗読は詩人の財部鳥子から。フィンランドのリーナ・カタヤヴオリ、歌人の尾崎左永子の伝統的美意識の歌、

炎天の檻に飼はるる孔雀ゑて檻を宇宙となしたる威厳

など。さらにスウェーデンのヨハネス・グランソンと続く。圧倒的なパフォーマンスで会場に熱気を生じさせたのは俳人のギ

ネマだった。巫女のような赤い着物をまといつてリングを捧げ、摺り足で歩いたかと思えば横飛びし、仰ぎ、憑かれたように何か口にしていいると思えば、それが俳句なのだった。

漆喰から昔の男を呼び戻す

約束は足の小指に結びけり

彼女への大きな拍手が沸くなか、会場には首をかしげる人もちらほら目についた。その後、スロヴェニアのイストック・オイソニックの落ち着いた朗読が終わり、休憩に入る。

再開後は、中国詩人金中の、夫人演奏の中国琴に合わせた表現豊かな漢詩の朗読。そして鎌倉佐弓の登場。

津波後の太陽なぜ欠けていない

雲にかなたの青き力を信じたし

鎌倉の朗読は耳で理解しやすい。朗読の速さや抑揚も関係しているのかもしれないが、何よりも日常的な表現が意識的に使用されているから理解しやすいのだろう。3・11後の不安に根ざした句が続いたあと、明るさを感じる句を最後に示す。明るい気分之余韻に希望を感じる。詩人の細見和之、モングルのハダー・センドー、歌人の久々湊盈子、詩人の高橋順子と続く。

夜はお別れパーティー。会場はリバティータワー二三階のサロン。この日、奇跡的に姿を現した影富士や美しい東京の夜景を見下ろしながら、皆、くつろいだようすでよく食べ、よく飲んでいいる。俳句、短歌、詩の朗読、さらにペルー仕込みの笹久保伸の現代ギター即興演奏に合わせて踊りだす人も出て、いつまでも楽しい余韻が残った。早くも次回開催が楽しみになっている。その時はこのユニークな詩祭のおもしろさを広く伝えることにも尽力したい。